

学位論文要旨

学位論文題目 日本語談話における沈黙に関する研究

申請者氏名 TA THANH HUYEN

日本語の談話では沈黙の出現が見られるが、出現する量は多い場合も少ない場合もある。沈黙の出現が多すぎであったり、まったく出現しなかったりすれば、談話が不自然だと考えられる。どの程度が出現したら、自然に感じられるだろうか。従来の研究では沈黙の意味や機能については行われているが、沈黙の出現の多少または沈黙がどのような統語環境に出現するかについてはまだ解決していない。そこで、本論文では、統語的なアプローチで沈黙の統語環境と出現傾向、そしてその傾向の中では沈黙がどのような意味・機能を持つかを検討することにする。また、前者においては、沈黙の世代差および性差も追求することにする。

言語データとしては、日本語母語話者を対象として筆者が収集した談話を使用する。世代差と性差を明らかにするため、20代と60代（若年層と老年層という対極にある世代）および女性と男性のデータを収集する。

分析では、統語（構文）的および意味・機能的な分析を行う。まず、統語的分析では、沈黙の統語環境をその「直前の要素」と「直後の要素」に分け、量的・質的な分析をする。そして、「直前の要素」と「直後の要素」は「最大投射（maximal projection）」という概念を用いて規定する。沈黙の統語環境を明らかにするため、言語単位（文、節、句、単語）と品詞に基づき、沈黙を分析する。また、ここでは世代差および性差も観察する。

結果としては、沈黙の統語環境を明らかにし、沈黙（性差、世代差に関わらず）が文または文らしいものの中に出現しやすい傾向にあることが判明した。また、量的な観察からは、沈黙の直前の要素または直後の要素により、性差や世代差が見られることが分かった。具体的には以下の通りである。

1. 沈黙の直前の要素

a. 世代の特徴：

- ・20代：単語レベルでは「副詞」、句レベルでは「感動詞類＋終助詞」、節レベルでは「C類」の直後に現れやすい。
- ・60代：単語レベルでは「名詞」「接続詞」、句レベルでは「名詞＋副助詞」、文レベルでは「文」の直後に現れやすい。

b. 性差の特徴：

- ・男性：文レベルでは「文」「文」の直後に現れやすい。
- ・女性：句レベルでは「感動詞類＋終助詞」の直後に現れやすい。

2. 沈黙の直後の要素

a. 世代の特徴：

- ・20代：単語レベルでは「接続詞」、句レベルでは「感動詞類＋終助詞」の直前に現れやすい。
- ・60代：単語レベルでは「名詞」、句レベルでは「名詞＋格助詞」「名詞＋副助詞」の直前に現れやすい。

b. 性差の特徴：

- ・男性：句レベルでは「名詞＋格助詞」「感動詞類＋終助詞」の直前に現れやすい。
- ・女性：単語レベルでは「形容詞」、句レベルでは「名詞＋副助詞」の直前に現れやすい。

さらに、質的な観察からは、世代差・性差において統語環境が包含関係にあるということが判明した。以下で述べる。

- d 20代の統語環境は60代のそれを包含している。
- ㉒ 20代と60代に共通する統語環境は、文らしい要素である。
- ㉓ 文らしくない要素であればあるほど、20代にしか現れない。
- ㉔ 直前の要素では、20代では男性の統語環境は女性のそれを包含しているが、直後の要素では、20代では女性の統語環境は男性のそれを包含している。60代では、直前の要素では20代のような傾向が見られないが、直後の要素では20代のような傾向が見られる。

以上のことから、統語的には、沈黙は接続詞と非常に類似した性質を持っていることが明らかになった。しかし、どの程度の類似性を持っているかについては、別のアプローチを試みる必要がある。そこで、次に意味・機能的分析を行う。

ここでは、接続詞が持っている意味・機能的な性質を、沈黙が持っているかどうかについて、談話データを観察しつつ分析した。その結果、沈黙は順接的な推論（順接、添加・累加、換言・説明）という意味関係を表すことが分かった。即ち、沈黙は接続詞の一部の意味関係しか表していない、という結論になった。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 137 号	氏 名	TA THANH HUYEN
論文題目	日本語談話における沈黙に関する研究		

(論文審査概要)

本論文の目的は、日本語の自然談話を対象として、一人の発話内に出現する沈黙の性質を解明することにある。まず、長時間にわたる二人会話の談話データを収集し、それを詳細に文字化した独自の資料を作成している。そして、それを対象として、統語的な分析を主に行っている。

具体的には、沈黙がどのような統語環境に出現するか、そこに世代差や性差があるか、という問題を追究している。前者においては、統語環境を「沈黙の直前の要素」と「沈黙の直後の要素」に分け、量的・質的に観察している。要素を観察する際には、まず文・節・句・単語といった言語単位、そして品詞に分類している。後者においては、前者の量的・質的分析から、若年層(20代)・年配層(60代)の世代差、及び男女差を分析している。

結果として、沈黙は文または文らしい要素の間に出現する傾向が高いことが判明している。これらの要素は生成文法理論(X'理論)で言う「最大投射範疇」である、という提案もなされている。さらに、意味・機能的な分析を進めた結果、「沈黙は順接的な推論(順接、添加・累加、換言・説明)を表す接続詞の一種である」という仮説も立てられている。すなわち、沈黙は逆接では用いることができないということが判明したことになる。また、世代差に関しては、「年配層よりも若年層の方が文末満の浅い境界で出現しやすい」といった傾向が得られている。性差に関しては、「若年層の男性の方がより小さな言語単位が前後に来るときに出現頻度が高くなる」こと、また「老年層では性差が見られない」ことが観察されている。

以上の概要を踏まえ、以下のように評価する。

1. 創造性

先行研究においては、沈黙の意味・機能的な考察を主としたものはあるが、統語的な観点での研究は見られない。また、社会言語学的な観点、理論的な分析も含まれており、その方法論については新規性が高い。結論としても、様々な観点からの法則性が導き出されていることに加え、理論的な仮説も設定されている点は極めて優れている。沈黙を含む超分節的(非言語的)な範疇に関する研究への貢献は多大である。

2. 論理性

独自に収集した談話データに対し、量的～質的な面、統語的～意味・機能的な面、記述的～理論的な面、文法的～社会言語学的な面といった多様な側面から考察し、そこから論理的に結論を導き出しているという点は極めて優れている。一貫性のある展開であると評価する。

3. 厳格性

先行研究を十分に渉猟咀嚼したうえで、統語的分析という新たな方法論を用いている。分析においては、沈黙が出現する大量の言語データを逐一検討し、記述している。証明資料や方法が厳密に用いられている点は極めて優れている。さらに、対象とする談話データは独自に収集し、適正に文字化したものであるため、それ自体が貴重なデータベースともなり得る。

4. 発展性

沈黙や笑いなどの超分節的な範疇に関しては、ほとんど研究がなされてこなかったが、本論文で、それが統語的な問題と関連することを萌芽的に提示した点は極めて優れている。今後、本論文での研究は、他言語との対照研究や言語教育学などの領域にも少なからず貢献できるものと考えられる。発展性については大いに期待できる。

以上の評価については、外部審査委員も一致した意見である。最終的に、審査委員会における審査委員の合議によって、本論文は博士学位論文の水準を満たしており、全体の評価を「達成できている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

合・否

審査委員

(氏名) 有元 光彦

(氏名) 鷹岡 亮

(氏名) 吉村 誠

(氏名) _____

(氏名) _____